

45

## 太平洋戦争後の行政の推移

## ■市制への道

一九四七年（昭和二十二）四月、第一回全国統一選挙が行われた。当時福生町は、多摩飛行場（横田基地）の拡張工事に集まった人々などで人口が急激に増加し、多岐にわたる問題を抱えての選挙であった。町長選はまれにみる激戦であったが、初の公選町長には岸徳次郎きしとくじろうが選ばれた。

一九五三年（昭和二十八）の「町村合併促進法」により、人口三万人以上で市制を施行できたが、「地方自治法」では、人口五万人以上と規定されていた。人口三万人以上で市制施行を望む町は多く、それらの町が、一九六八年（昭和四十三）明治百年を記念して、人口三万人で市制が施行できるよう働きかける「新市制実現全国期成会」を結成した。期成会は、七月十八日福生町で、市制定の特例法の立法措置を求める総会を開催した。以後展開された運動の結果、一九七〇年（昭和四十五）三月四日「地方自治法の一部改正案」が参議院で可決された。期成会設立以来約二ヶ年の歳月を経て、ようやく三万市制の夢が実現したのであった。

町制施行から三〇年後の一九七〇年（昭和四十五）、福生町の人口は東京都の推計で、三万七〇〇〇人を超えていた。三万市制が可能になったこの年、福生町はその第一号として自治省から市制を許可されたのである。



新市制実現全国期成会総会 福生町役場会議室 昭和43年  
7月18日総会を開催し、本格的な運動に入った。



市制施行記念の文字飾り 福生市立第一小学校校庭。

そして一九七〇年（昭和四十五）七月一日、人口三万八七四九人、世帯数一万一六三二戸をもって福生市が誕生した。

### ■米軍の進駐

一九四五年（昭和二十）九月四日、多摩飛行場に、米軍第一騎兵団一個中隊がはじめて進駐し、つづいて米軍第二航空輸送団が進駐してきた。飛行場は接収後、大規模な滑走路工事が行われ、翌昭和二十一年八月十五日に厚木に進駐していた米軍第三爆撃飛行隊が進駐してきた。この日をもって公式に基地が開設され、当時の村山町（武蔵村山市）の字名である「横田」をとって、横田基地とよばれるようになった。

米軍が進駐してくると、福生では、駐留軍に対する勤労動員がなされた。人びとはおそるおそる横田基地に入ったが、煙草やガムなどを貰いながら働いたという。福生駅付近では、米兵に英語を教えてもらう者も多くなった。

### ■数次にわたる基地の拡張

一九五〇年（昭和二十五）に始まった朝鮮戦争のあいだに、数次にわたる拡張が行われた。一九六〇年（昭和三十五）には、滑走路とオーバーランの延長、飛行場北側に拡張用地、航空障害物制限区域など、約五〇万平方メートルが提供され、面積約七〇〇万平方メートル、滑走路三三三・五〇メートルのほぼ現在の規模となった。このため、基地の南側では五日市街道の付替え、北側では国道一六号と八高線の移設などが行われている。

一九七一年（昭和四十六）五月には、戦闘部隊が沖繩へ移転した。そのため、この時点で戦闘基地



横田基地(昭和29年) 写真下端中央の建物が旧日本陸軍航空支廠熊川出張所(熊川倉庫)である。

としての機能はなくなり、兵站基地としての性格が強くなった。さらにベトナム戦争の激化にともない、輸送基地としての重要性も増した。現在、横田基地は日本本土では最大の米空軍基地であり、在日米軍司令部と第五空軍司令部などがおかれ、極東における輸送基地としての機能をもっている。

### ■福生と横田基地

福生の変貌を、基地とのかかわりで見ると、三つの時期に分けることができる。最初の時期は、昭和二十年代である。この時期は、福生が基地の町であるための矛盾が噴き出してきた時代であった。米軍が進駐し、基地拡張工事が行われ、人口が急激に増加し、海外からの引揚者や工事関係者の流入



町役場の屋上から横田基地方面をのぞむ(昭和24年) 左端の白い建物は武陽信用組合(現在、市もくせい会館のある位置)。

に加えて、街娼婦や風俗関係業者も多数入ってきたことから、さまざまな問題が発生した。基地や基地関係者からもたらされる塵芥、汚物清掃、道路交通、消防、風紀の乱れなどに振り回された時期であった。

太平洋戦争後の混乱のなかから復興が始まり、それが軌道に乗りはじめた昭和三十年代が第二期である。町の基盤整備が進められ、将来への方向づけが行われた時代である。経済の発展は、首都圏への人口集中を促し、その勢いが増してくると、三多摩地域での都市化現象が進み、福生もその例外ではありえなくなった。そのような状況のもと、一九五六年(昭和三十一年)「福生都市計画案」が作成され、新しい都市づくりをめざすことになった。

一九六三年(昭和三十八年)には、加美平地区かみひらの区画整理事業が認可されるなど、道路、上水道、駅前広場、さらに郵便局や電報局、警察署などが新、改築され、社会資本の整備が進められた。人口の急激な増加は、一方で小学校や中学校の新、増築なども緊急の課題となり、財政上の大きな負担となった。

この時期ほどダイナミックに町の様相が大きく変貌した時代はなかったが、町の近代化と同時に、町財政は収支のバランスを崩し、財政赤字を招くこととなった。一九六五年(昭和四十)には、赤字団体に転落し、以後昭和四十二年地方財政再建法の適用が解除されるまでの約二年間は、支出削減に向けての努力が払われることになった。

第三期は、昭和四十年以降の時期である。「地財法」ちざいほうの適用が解除されると、町財政の強化のため、



加美平地区区画整理事業(昭和40年代初頭) 町の北端部、面積66ヘクタールの区域である。

さまざまな財源確保に向けての努力が払われる。基地との関連でみると、一九六六年(昭和四十一)「防衛施設周辺の整備等に関する法律」が制定され、基地周辺の自治体に対し、民生安定施設整備に対する助成金が支払われることになった。さらに、世界情勢の変化を受けて、在日米軍施設が横田基地に集約されるようになり、昭和四十九年から「生活環境整備法」が制定され、社会資本のいつそうの充実が図られた。

福生市は、市域面積の三三・四パーセントを横田基地が占め、都市づくりのうえで大きな阻害要因となっている。ただ、基地に対する市民の意識調査の結果をみると、七五パーセントの市民が基地の存在を肯定ないし容認している。この現状をふまえ、市民生活の充実と発展のための努力がつけられている。いま、世界の情勢は大きく変わりつつある。このような国際情勢の変化は、横田基地にも影響を及ぼさずにはいられない。

### ■市民憲章の制定

一九八〇年(昭和五十五)七月一日に行われた市制一〇周年記念行事のなかで、「市民憲章」が発表された。市民憲章の制定は、急速に都市化が進み発展する一方で、市民の意識や生活も大きく変わりつつあるなか、かつての隣人関係などにより育ってきた市民同士のつながりやまとまりがしだいに薄れ、町にも地域にも関心を示さないといった市民が生まれることも予想された。そこで、新しいまちづくりの礎となり、すべての市民が、日常生活とともに実践できる心の支えとして、市民憲章を制定し、活力ある市民の町を実現しようというものであった。



福生十景・多摩川の桜並木 平成3年、福生十景を制定。福生第一の桜の名所。多摩川の眺めと調和する桜花の季節は圧巻。桜まつりは大勢の人出で賑わう。

## ■六万人市民

福生市の人口は、二十一世紀には六万人台で推移すると思われる。四〇〇〇年前の縄文時代には五〇人程度の人びとが暮らす地であった福生の人口が、一万人の大台にのったのは、二十世紀半ば、

### 〔福生市民憲章〕

美しく連なる山なみを望み、しずかに流れる多摩川のもと、雑木林と桑畑の武蔵野台地にひらけた福生市は、多くの人たちのたゆまない努力によって発展をつづけています。

私たち市民は、この地をふるさとして愛し、平和を願い、いきいきとした市民のまちをつくるため、ここに市民憲章を定めます。

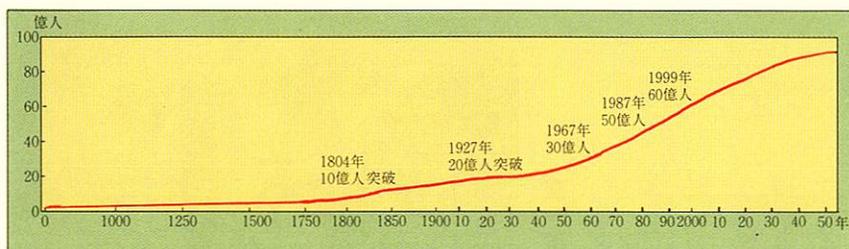
一 私たちは 健康な心と体をつくり 充実した豊かな日々を送りましょう。

一 私たちは 老人を敬い 子供の健やかな成長につとめ 明るい家庭をつくりましょう。

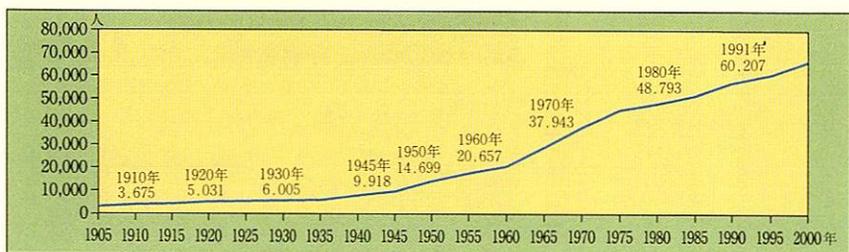
一 私たちは 自然をたいせつにし 花や木を育て 美しい緑のまちをつくりましょう。

一 私たちは 教養を高め 情操を養い 文化の薫るまちをつくりましょう。

一 私たちは たがいに親しみ 助けあい みんなが幸せになるまちをつくりましょう。



世界の人口の推移と推定

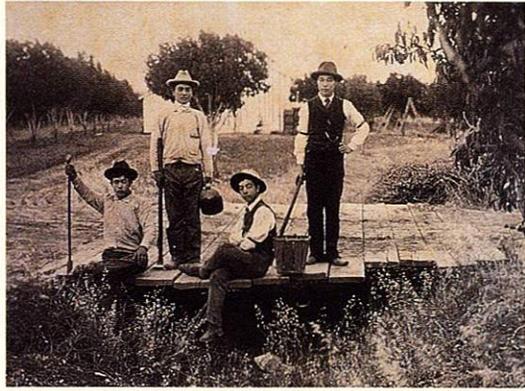


福生市の人口の推移と推定

一九四六年（昭和二十一）のことである。それが今世紀後半、わずか五〇年の間に急激にふえたのである。福生市の人口は、首都東京への一極集中により東京のベッドタウンとして、急速に増加した。

一方、世界の総人口は、今年六〇億人を超える。二〇〇〇年前は約三億人であった人類が、一〇億人の大台にのったのは、十九世紀に入ってからのことである。それが今世紀急激に増加し、いままもなく八〇〇〇万人以上のペースでふえつづけ、高齢化、人口格差、食糧、雇用、環境といった諸問題の解決が迫られている。

一九九三年（平成五）時点で、わが国の六十五歳以上の高齢者は年々増加しているのに対し、十四歳以下の子どもは年々減少する傾向を示しており、長寿社会は急速に進行している。そして、福生市の人口構成を十四歳以下の年少人口、十五歳以上六十四歳までの生産人口、六十五歳以上の高齢者人口の三区分で見ると、年少人口、生産年齢人口ともに年々減少する傾向があるのに対し、高齢者人口は増加する傾向にある。このように福生市においても、少子化、高齢化が着実に進行しているのである。



サンフランシスコ周辺での熊次郎(明治30年代) 右端の人物が木村熊次郎と思われる。

■地球時代・木村熊次郎と森田浩一

日本から海外に出かける機会がふえるとともに、日本を訪れる外国人もふえており、日常生活レベルの国際化が進展してきている。日本人の海外旅行者数は、一〇年以前の約三倍に達している。また、海外直接投資の増加などによって、日本人が海外で暮らす機会もふえてきている。

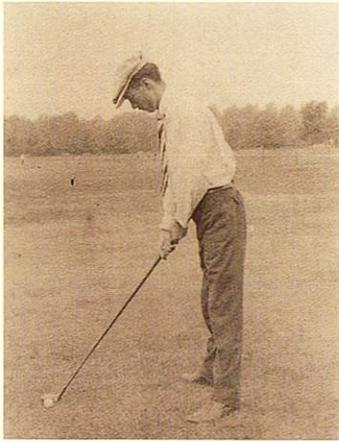
その一方、日本を訪問する外国人は、過去一〇年間で約六〇パーセントの増加となっている。また、福生市の外国人登録者数は、多摩地域の他の市町村と登録比率を比較すると、もっとも高くなっており、東京都の平均値を上回っている(ちなみに福生市の外国人登録者数は一〇年前にくらべ倍増して



熊次郎が福生の家族に宛てた年賀状(明治40年)



熊次郎が福生の母に宛てた葉書 明治40年、Muff(手あため)を送ると記す。



アメリカでゴルフに興じる森田浩一(大正7・8年)

いる)。

このような国際化が進展する現代社会にさきがけて、福生市には、早くから海外へ出て活躍した人たちがいた。その一人に木村熊次郎きむらくまじろうがいる。熊次郎は、福生村の農家の長男として一八六七年(慶応三)二月九日に生まれた。若くしてアメリカに渡り、苦学のなかキリスト教にふれ信徒となり、帰国後、日本や中国の大連などでキリスト教の布教活動にあたった。

熊次郎が一九〇六年(明治三十九)に認めた書簡によれば、一八九三年(明治二十六)二十七歳でアメリカに渡り、諸国を流浪したのち、一九〇二年(明治三十五)、ふたたびアメリカに入国し、一九〇六年にはアメリカ在留四年八か月を数えている。熊次郎は、サンフランシスコ周辺で働きながら学び、信仰を深めた。このころ、熊次郎はアメリカ人の家庭に住み込み、スクールボーイしゅーせいというのを書生のようなもので、朝六時ごろ起きて八時半ごろまで働き、そのあとでスクールボーイしゅーせいというのは書生のようなもので、朝六時ごろ起きて八時半ごろまで働き、そのあとで学校に行き、午後四時ごろ帰宅し、午後七時半から八時ごろまで働くという生活であった。

一九〇七年(明治四十)にはスクールボーイをやめ、午前中働き、午後学校へ行き、帰宅後また働き、そして夜学に通うという生活をしてきたが、この年の収入は四〇七ドル六五セント、日本円にすると八〇〇円以上であった。そのなかから故郷の母親に一〇〇円送金し、また、福生村の徴兵援護会へ一〇円を寄付している。

森田浩一もりたこういちもまた福生から海外へ渡った一人である。浩一は、熊川村の森田製糸所経営者の退蔵、美知子の長男として一八九一年(明治二十四)に生まれた。熊川村開村以来の神童とよばれ、一九〇一年(明



ジョンズホプキンス大学の研究室での森田浩一 大正7・8年、森田浩一は植物学を専攻。



森田浩一(大正七年 出国申告書に貼付された写真から)

治三十四)に創立されたばかりの府立第二中学校(現都立立川高校)に進学した。二中でも秀才でとおり、第一高等学校から東京帝国大学に入学した。一高時代は南寮で矢内原忠雄(のちに東大総長)らと生活をともした。東京帝大では植物学を専攻し、卒業後も大学院に残り研究をつづけていた。

明治の末から大正時代にかけては、森田家の全盛時代で、一九〇六

を受賞するなど、海外でもすぐれた蚕糸としての評価も受けている。このころ森田製糸所とサンフランシスコの木村熊次郎との間には交流があったようで、一九一〇年(明治四十三)には、木村熊次郎は森田家に鮭(一五尾入り、八八個)を送り、その代金三二〇円を受け取っている。

浩一は、かねてからアメリカへの留学を希望していたが、一九一八年(大正七)、ワシントン市の北にあるボルチモア市のジョンズホプキンス大学に留学した。しかし留学中の一九二〇年(大正九)の冬、世界的にスペイン風邪が猛威をふるい、アメリカも例外ではなく、浩一はスペイン風邪にかかってジョンズホプキンス大学病院に入院した。その年の二月八日、手当ての甲斐もなく、三十歳の若さでこの世を去った。



福生市青少年海外派遣事業 アメリカ合衆国ユタ州オグデン市ゲイズビル小学校での日米文化交流風景。平成2年から市内の中学生12名を毎年アメリカに派遣し、文化交流を図る青少年海外派遣事業を始めた。

## ■歴史認識とグローバルコミュニケーション

現代の世界は、地球温暖化、熱帯雨林の減少、酸性雨、オゾン層の破壊など、地球環境にかかわるさまざまな問題が顕在化してきている。とくにCO<sub>2</sub>などの温室効果にもなう地球の温暖化の問題は、経済活動に不可欠なエネルギー消費量の増加にもなうって進行しており、このまま放置すれば、回復困難な環境悪化を招く恐れがある。まさに地球には危険信号が灯っているのである。

こうした地域、日本、さらに地球規模の諸問題の解決は、人類の一員である福生市民一人一人の行動にかかっている。わたしたちの日常生活においても、地球レベルの発想が求められているのである。

物質の豊かさを求めてきたわたしたちは、今たんに生活の利便さを追い求めるだけではなく、人と自然が共生していくことも目指すようになった。地球の砂漠化防止に、世界各地で日本人が植樹する姿はめずらしくなくない。これはまさに地球規模の人間尊重と支え合いである。

現代の地球で、異なる歴史と文化をもつ人びとが共生していくためには、お互いに理解を深め、尊重する心もち、支え合う必要がある。そのためには、一人一人が自文化に対する理解と、自国の歴史に対する認識を深めなければならない。それによってはじめて隣人の有する文化と歴史を尊重する地球社会が成り立つのである。